

Title	キャンパスにおける礼拝、その充実：チャペル完成の恵みを受けて
Author(s)	鵜沼, 裕子
Citation	キリスト教と諸学：論集, Volume21：135-139
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2823
Rights	

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

キャンパスにおける礼拝、その充実

～チャペル完成の恵みを受けて～

鵜 沼 裕 子

今年三月の定年退職を控えてこのような機会を与えていただきましたことに、まず心より感謝申し上げます。本来なら、大所高所の見地から、しかるべき研究や資料にもとづいて、現在や将来を見据えたお話をすべきかと思いますが、今回はむしろ、「こういうチャペルであってほしい」という私の個人的な願いをお話ししたいと思えます。用意した資料もまことに簡略なものです。しかし内容は決して御座なりの思いつきではなく、チャペルに寄せる私の心からの思いです。これは私が、私自身の就任当時、まだチャペル建設の議がようやく話題になり始めたばかりのころから抱いていた願いであり、同時に、完成したチャペルに身を置いてみて、改めて心に感じたことでもあります。

一、聖学院ファミリーの「心の居場所」

私が本年度を最後に定年退職するということを各授業で話したところ、多くの学生たちが、出席表の余白や答案

用紙の末尾に、ねぎらいやはなむけの言葉を書いられました。一番多かったのは「長い間お疲れさまでした」という言葉で、「健康に気をつけて」、「いつまでもお元気で」などというものがそれに続きました。

その中でひとつ、次のような言葉が私の目に留まりました。それは、「退職なさった後も、礼拝にいらして下さい」という言葉で、ある試験の答案の末尾に書かれたものでした。試験はまだ終わっていなかったのですが、私はひとこと声をかけてみたい思いに駆られて、その学生を呼び止め、「どうして礼拝に、と書いたの？」と尋ねてみました。その時は、当然のこととして、この学生はグレイスカ聖歌隊など、何らかのキリスト教活動グループに属している学生に違いない、と思っていました。ところが意外なことに、彼はそれらのいずれとも関係のない、そしてもちろんクリスマスチャンでもない、ごく普通の聖学院大学の学生でした。そして、私がなぜわざわざそんなことを聞いたのかと、ちよつと戸惑ったような様子でした。

試験中でもあり、それ以上話を続けることはできなかったのですが、その後も私は、この言葉がずつと心にかかり続けていました。そして、このときの学生の気持ち、私なりに次のように推し量ってみました。

「この学生は、退職していく教師に対し、単純にまた遊びにきてほしい、という気持ちを伝えられたのであろう。しかし、ただ『また遊びにいらして下さい』というだけでは、いかにも通り一遍の挨拶と受け取られてしまう。もう少し気持ちのこもった言葉にしたい。かといってヴェリタス祭にとか、創立記念日に、などと書いては、逆に具体的すぎて不自然である。そう考えたとき、退職した教員が再び訪ねて来るのにふさわしい場所として彼の心へ浮かんだのが、チャペルというものだったのではなからうか」。

そして更に私には次のような思いが浮かびました。それは、もしも従来のように四号館や一号館の大教室で礼拝が行われていた頃であつたら、恐らくこういう言葉は聞けなかつたのではなからうか、ということ。もちろん

私は、大教室での礼拝を真に神を讃美するにふさわしいものとして整えるために、チャプレンや職員の方々が多大の努力をして下さったことを知っています。しかしなおそこでの礼拝は、多くの学生にとって授業の延長であり、課せられる礼拝レポートは、一般の授業の課題とあまり変わらないイメージで受け止められていたのではないのでしょうか。なぜなら、そこは礼拝の時間帯だけに確保された場所に過ぎず、礼拝が終わればそこはただの教室となつて一般の授業が行われ、もはや特別な場所ではなくなるのです。一時的に礼拝の場としてしつらえられた教室は、ある意味で抽象化されたチャペルに過ぎず、キャンパスを去つた者が立ち返れる具体的な場所ではありません。しかし今やチャペルの完成によつて、神を讃美礼拝するための特別な場所が常時備えられることになりました。ここは、聖学院大学にかかわるすべての人々にとつて、大学の理念が具体化された「心の居場所」であり、退職した教員が再び訪れるにふさわしい具体的な場所でもあります。ここに、退職者だけでなく卒業生も含め、縁あつて聖学院大学に連なつたすべての人々は、常に立ち戻れる「居場所」を与えられたのです。上記の一学生の言葉は、（恐らく当の本人も気づかぬ仕方です）その思いにまさる恵みを私に気づかせてくれたのだと言えるでしょう。チャペルはすでにそのようなものとして存在しています。そして、今後もそのような場所であり続けることを、私は心から願っています。

二、靈性の養いのための聖空間

完成したチャペルに初めて入つていろいろな説明を受けたときに、最も感銘を受けたことのひとつは、壇上の中央の椅子が、イエス・キリストの座られる場所としていつも空けてある、ということでした。このような例は他の

教会にもあるそうですが、私は初めて知ったことであつたので、新鮮な驚きと感動を覚えました。常に空席として保たれているこの椅子の存在は、このチャペルの空間が、「聖なるもの」との対座の空間であることを、絶えず私たちに想起させてくれるのではないのでしょうか。

今年の新年教職員研修会で、私が属したグループのディスカッションでは、「開かれたチャペル」を望む声が強く聞かれました。それは、地域や卒業生のための集まりに、チャペルを広く活用すべきである、という趣旨だと思われました。しかし私は、誤解を恐れずに敢えて言えば、チャペルはむしろある意味で「閉ざされた空間」であることを願っています。それは、ここは私たちが「聖なるもの」と対座する聖空間であることを第一義とすべきではないか、ということですよ。(もちろんそれは、ここを礼拝以外の目的に使ってはならない、ということではありませぬ。)

私は、かつてハリストス正教会の総本山である御茶の水のニコライ堂を訪ねたときの感動を忘れることができません。ご存じのように御茶の水界隈は、常に若者の活気に溢れた賑やかな街です。しかしひとたび堂内に足を踏み入れると、あの壁で仕切られた空間だけがあたかも古代にタイム・スリップしたかのような不思議な感覚にとらわれたのでした。たまたまそこで出会った知人も、「高みに引き上げられるような気がする」と、感慨深げに語っていたのが印象的でした。そして、香山寿夫先生が精魂を込めて創り出されたこのチャペル空間もまた、私たちを自ずと「聖なるもの」のみに引き出してくれる力を持っています。私たちはここで、心を静めて空席の椅子の主と対面し、「聖なるもの」と対座する時をもつことができますのであります。

では、そうした姿勢を整えるために、礼拝に何か特別の工夫をすべきでしょうか。私は、チャプレン方の英知によつて、大学教会では行われぬ聖礼典に代わるべき「静思の時」を礼拝の中に作っては、などと考えてみたりも

しました。しかし、発題のあとの質疑応答も参考にこの稿をまとめている現在は、もはやそのような「技巧」は必要ではないと思うようになりました。なぜならこの空間には、そこに身を置く者を自ずと沈思へと導き、聖性に触れさせ、心も体も清める力があるからです。この場所で礼拝を捧げ、身も心も洗われた者ならば、ここを出たとたんに口汚ない言葉をぶつけ合ったり、粗野な行動をとったりするでしょうか。つまり、この空間それ自体が靈性を養う力を持っているのです。それだけでよいのだ、と今の私には思われるのであります。

たまたま私の最終講義を聞きにきてくれた友人をチャペルに案内したところ、ここはいつでもだれでも自由に入って祈れるのか、と尋ねられました。また、礼拝の前に暫く祈らせてほしい、と言ってくる学生が、少数だがいる、ということも職員のお一人から聞いて、そういうことが現実にも求められていることも知りました。残念ながら防犯を初めさまざまな理由から、学内に入り自由の閉鎖空間を作ることには難しいのが現状です。このことについては、週に一回でも、だれでも自由に入れる時間を作っては、という意見も出されました。理想を言えば、その場合、祈るために入る人は学内の人に限りません。従って、「開かれた」、とか「閉じられた」、という表現は、物理的に戸を開かず、とか学外に対して開く、とか閉じる、ということではありません。その意味で、このことはむしろ「聖と俗」と表現した方が適当かもしれないと思つています。

チャペルの完成を機に、靈性の涵養という聖学院大学の理念がますます深められていくことを願っています。

(二〇〇五年二月二四日、全学礼拝懇談会)